ふるさとワイド

ここに生きる ―72―

田代 房枝さん(75) 屋久島町宮之浦

創業105年の旅館女将

日本舞踊でもてなす

朝は五時半に起床。客の見送りは欠かしたことがない。夜は仕事が終わって午後十一時すぎに風呂。ここでも翌日客が使うときに不都合はないかチェックの目が働く。就寝するのは午前零時半―。女将になって五十余年、刻み続けてきた日課だ。

田代別館の前身である田代旅館の創業は、一九〇四(明治三十七)年。今年で百五年目。「屋久島で一番長く続いている旅館」と自負する、その最初の建物は宮之浦川左岸の街中にあった。木造平屋建てで、部屋数はわずか三部屋。

二十三歳で結婚、三代目の若女将となった。「当時のお客さんは、仕事関係の人ばかり。観光で訪れるお客さんなんて、いなかった」と振り返る。

宮崎がハネムーンツアーでにぎわいだしたころ、やがてその波は屋久島まで来ると踏み、六八(昭和四十三)年に建て替え。名前も「田代館」にした。以後増築を繰り返し、最終的には三階建てになった。

だが、大きくなるにつれ、観光客が激減する冬場をどう乗り切るかが課題となった。そのことは、今も屋久島の観光業に携わる人すべてに共通する悩みだが、「地元の人のおかげで乗り切ることができた」という。「忘と感謝する。

大事にしているもの、それは「お客さまをもてなす心」。八六(同六十一)年、場所を川向かいに移し別館建設に踏み切ったのも、その思いゆえだった。「雨上がりの川霧と唐船峡の森のみどりの美しさ。このロケーションは、きっとお客さまの心を癒やしてくれる」。そう確信したためだった。

三十歳を過ぎたころ、本格的に日本舞踊を習い始めた。仕事の合間を縫って、鹿児島まで習いに通った。客席で披露した踊りが喜ばれたのがきっかけで、以来踊りは「おもてなしの心の表現のひとつ」として、田代別館の名物になった。

屋久島出身の歌手、日高正人さんの曲に、自ら振り付け、数人の仲居とともに踊る。「お客さんがいらっしゃる限り、毎晩四―五曲は披露する」という。六十一歳のとき、がんで胃を切除。以後、五日ごとにワクチン接種を続けながら、今夜も元気に舞台に上がり踊る。

(屋久島支局・長井三郎)

夕方着物に着替え、フロントに立つ田代房枝さん

たしろ・ふさえ 1932年屋久島町宮之浦生まれ。旧姓中島。55年田代幹郎さんと結婚、3人の子どもに恵まれる。4代目の長男幹治さん(五)を支えながら、孫2人と暮らす。

年会や新年会などの各種宴会、結婚式や米寿の祝いなどに使ってもらい、地元に支えられ助けられてきた」